

ポリシーディベートを用いた協働的探究学習の試み*

上田真梨子**

An Attempt for Collaborative Inquiry Based Learning Using Policy Debate

Mariko UEDA

1. はじめに

令和4年度に佐世保工業高等専門学校(高専)の3年次の課程に新科目の「グローバルリテラシー」が開設された。この科目は基幹教育科所属の教員がそれぞれ地域的なテーマを設定し、10人前後の少人数ゼミで協働的探究学習を行うものである。筆者は自身が担当するゼミにおいて少子化問題をテーマとして取り上げ、学習を深める手法として2つの立場から政策の是非を問うポリシーディベートと対話を通してよりよい政策を検討していく政策提案型パブリックディベートを取り上げる計画を立てた。本稿では、筆者が担当する「ディベートで読み解く少子化対策」のゼミにおける中間発表までのポリシーディベートを中心とした学習の過程について記述し、最終発表への課題について考察する。

2. グローカルリテラシー

グローバルとは「グローバル(世界的)」と「ローカル(地域的)」からなる造語である。「グローバルリテラシー」の科目は、学生がグローバルとローカルの両方の視点を持って地域の課題を見出し、解決に向かって取り組んでいける素養(リテラシー)を育むことを意図して新設された。

令和4年度は基幹教育科所属の19名の教員がゼミを開講し、1ゼミごとに10人前後の学生が配属になった。授業の進め方は、各ゼミを2グループに分けそれぞれのグループで課題(テーマ)に対して取り組む。

授業は通年開講で、30週の授業時数はゼミごとの取り組み(24週)と、共通で実施する中間報告(1週)・最終報告(1週)・論文執筆(4週)の構成になっている。

中間発表では2~3ゼミ合同でパワーポイントを用

いた8分の発表と3分の質疑応答を行い、最終発表ではグループごとにA1サイズのポスターを作成し、学年全体で小グループに分かれて各グループのポスター発表を見て回り、最終的に各グループで共同執筆の形式で論文を作成することを予定している。

令和4年度のシラバスでは、各ゼミ共通の図1の授業目標が設定されている。

- | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 他者の話をしっかり聞くことができる 2. 収集した情報から活用すべき情報を選択できる 3. 収集した情報を正しく発信できる 4. 事実をもとに論理的に考察できる 5. 周囲の状況と自身の立場に照らし、必要な行動をとることができる 6. チームのメンバーとしての役割を把握した行動ができる 7. グローカルな観点から課題を設定し、探究することができる 8. 探究した課題を、発表できる 9. 探究した課題について、協働して論文を執筆できる |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

図1 グローカルリテラシーの授業目標

授業の評価として全体で統一して実施するのは、授業の初回・中間発表・最終発表の3つの時期に行う「分野横断的能力自己点検用簡易テスト」とそれ以外の毎回の授業で行う「ポートフォリオ」がある。分野横断的能力自己点検用簡易テストは「コミュニケーションスキル」、「合意形成」、「情報収集・活用・発信力」、「課題発見」、「論理的思考力」、「主体性」、「自己管理能力」、「責任感」、「チームワーク力」、「リーダーシップ」の10の観点に関して66項目の質問がある。少人数のゼミの変容を考察するには項目が多すぎるので、本稿では分析を割愛する。一方、ポートフォリオは授業の振り返りを記述する項目と、

* 原稿受付 令和4年10月31日

** 佐世保工業高等専門学校 基幹教育科

図2のルーブリック自己評価の項目がある。

能力	到達目標
コミュニケーションスキル	他者の話をしっかり聞くことができる
情報収集・活用力	収集した情報から活用すべき情報を選択できる
情報発信力	収集した情報を正しく発信できる
論理的思考力	事実をもとに論理的に考察できる
主体性	周囲の状況と自身の立場人照らし、必要な行動をとることができる
チームワーク	チームのメンバーとしての役割を把握した行動ができる

図2 ルーブリック自己評価の項目

- 到達目標のレベルは以下の5段階のレベルがある。
- S: 自分なりの判断や工夫により、状況を変化させる行動をとる、あるいはその基礎を作る
 - A: 今の状況の中で、自分なりの判断と工夫を加え最善と思う行動をとる
 - B: やるべきことをやるべき時に行う
 - C: 言われたとおりに行動する
 - D: 行動が伴わない

上記のレベルをSは5、Aは4、Bは3、Cは2、Dは1と数値変換し、各授業ごとのゼミ全体の自己評価の変容は後述する。

筆者は以前からディベート教育を研究のテーマにしてきたため、日本が抱える問題についてディベートの試合を行うことで理解を深める内容のゼミにしたいと考えた。ディベートの論題としてよく取り上げられるテーマの中で、少子化問題が筆者自身が育児休業を体験して知識が豊富であり、学生自身が早くて10年以内に直面するであろう問題であったため、ゼミのテーマを「ディベートで読み解く少子化対策」に設定した。前期の中間発表までに、「日本政府はすべての父親の育児休業を義務化すべきである」という論題でポリシーディベートに取り組む活動を8週割り当て、

後期に「2030年までに長崎県の合計特殊出生率を2.0%まで上げるための政策」というテーマで政策提案型パブリックディベートに取り組む活動を7週割り当てた。

3. 協働的探求型学習におけるディベートの役割

北岡(1995)はディベートを広義に定義して、図3のように5つの段階を合わせたものをディベートと呼んでいる。

1段階	論題の選択
2段階	資料とデータの収集と分析
3段階	論理の構築
4段階	ディベート試合
5段階	判定

図3 ディベートの定義

ディベートには様々な形式が見られるが、法廷でのやりとりや国会での与党と野党との論戦などの実社会ディベートに対し、教育現場で行われるものはアカデミックディベートと呼ばれる。日本ディベート協会の定義では、アカデミックディベートの中で、肯定側と否定側の2つの立場からある政策をとるべきか否かを論じて勝敗を競う形式のものをポリシーディベートと呼ぶ。本実践では、前期の授業においてポリシーディベート自体を学ぶことに加えて、男性の育児休業の義務化という論題について理解を深めることを目的とした。

松本(2009)はディベート教育において体験できることを図4のように指摘している。

個人	①批判的思考 ②論理的思考 ③社会的な問題を主体的に考える ④さまざまなスピーキング形態
集団	①個人に対する効果 ・議論技術の向上 ・知識の獲得 ・チームワークの大切さの認識 ②組織に対する効果

図4 ディベート教育がもたらす体験

北岡のディベートの各段階の活動や、松本が指摘したディベート教育で養う力は、図1のグローバルリテラシーの目標と以下のように関連している。

「1. 他者の話をしっかり聞くことができる」については、ディベート試合の際は、フローシートという議論の流れをメモする用紙に記入することが必須であり、要点を踏まえてメモを取ることや、反論すべきポイントを探すためにじっくりと相手の主張に耳を傾けることが要求される。

「2. 収集した情報から活用すべき情報を選択できる」、「4. 事実をもとに論理的に考察できる」は、ディベートの立論や反論の原稿作成の際に、自分の主張の根拠となる証拠資料を書籍やインターネットの記事から探し出す活動に関連している。これは、松本が指摘している批判的思考や論理的思考の育成に関連している。

「3. 収集した情報を正しく発信できる」、「8. 探究した課題を発表できる」は、立論や証拠資料で資料を適切に引用することを学習することや、試合の中でスピーチをする際に聴衆に伝わるように声の大きさやアイコンタクトに気を配ることに関連している。また、松本が指摘する立論、質疑応答などのスピーキング形態を学ぶことに関連している。

「5. 周囲の状況と自身の立場に照らし、必要な行動をとることができる」、「6. チームのメンバーとしての役割を把握した行動ができる」は、ディベートは肯定側と否定側と2チームに分かれて試合をするため、聴衆を説得して勝つためにチーム内で協働することを通して、松本が指摘するチームワークの大切さの認識につながる。

このように、ディベートを通じて養う論理的思考力、コミュニケーション能力、チームワークは、グローバルリテラシーが求める課題を見出してチームで協働して思考を深める探究型学習の目標に見合ったものである。

4 ゼミの進行

令和4年度の筆者のゼミには、3学科から男子6名、女子3名の学生が配属された。グローバルリテラシーの授業では、各ゼミの中で2つのテーマを設定しなければならないため、筆者のゼミは「少子化対策」と「ディベート」という大枠のもとで、アプローチの

観点で2グループに分けた。中間発表までのポリシーディベートの際は、肯定側と否定側のグループ、パブリックディベートの際は行政側と企業側のグループに分けた。Aチームが「肯定側」と「行政側」のアプローチを取り、Bチームが「否定側」と「企業側」のアプローチを取るグループである。Aグループは2学科の5人のメンバーのうち女子が2名、Bグループは1学科の4人のメンバーのうち女子が1名の構成となった。授業以外で作業を進める際の集まりやすさを考えて、同じ学科の学生は同じグループにした。

以下、中間発表までのゼミの活動の過程について記述する。

4.1 第1回ゼミ

第1回の授業は、全ゼミ共通のオリエンテーションを行い、グローバルリテラシーの一年間の流れについて説明し、前述の分野横断的能力自己点検用簡易テストを冒頭実施した。

拙論(2002)では、ディベート実践に影響を与える実践者が置かれた状況を「実践基盤」と定義し、その構成要素の一つとして、学習者の背景となる今までのディベート経験が、ディベート試合に至る前段階活動を選択する上で重要な要素であると指摘した。学習者がすでに小・中学校の教育の中でディベートを十分に経験していることが理想的だが、学習者のディベート経験には個人差がある。朝美(2018)が大分高専で行った調査では、小中学校で経験している学生は56.2%であった。学生の経験を把握し前段階活動の内容を考慮するため、第1回目のゼミで所属学生9人に下記のディベート経験についてのアンケートに回答してもらった。

図5~7は、ゼミ生のディベートについての過去の経験、学校で経験した場合の科目、おおよその経験回数について表している。ディベートをテーマにしたゼミを選んだ学生の集団のため、9人中8名が経験があるという高い割合になっているが、回数で見ると4回以上の経験者が4名、それ以外が5名となり経験にばらつきがみられる。20回と回答した学生は、小学校と中学校で国語、道徳、学級活動の時間で経験している。ゼミ生が小中学校で受けてきた教育は、平成20年に出された学習指導要領に基づいたものであるが、この時期の教育では言語活動の充実や確かな学力の

1つとして思考力、判断力、表現力が重視されるようになった時代なので、ディベート活動も推奨されていた。従来のディベート実践論文に描かれた学習者の背景に比べると経験に恵まれているようである。

Q1 あなたはディベートを授業で経験したことがありますか？

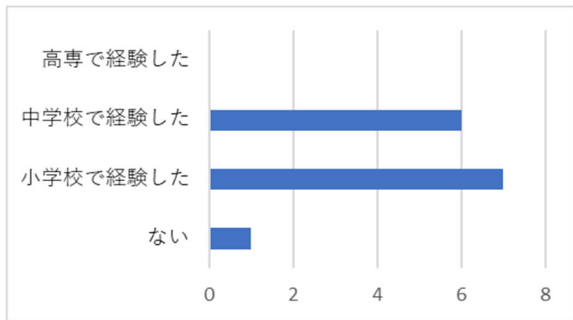


図5 ゼミ所属学生のディベート経験

Q2 Q1で経験があると答えた人は、あてはまる科目を選びなさい。(複数回答可)

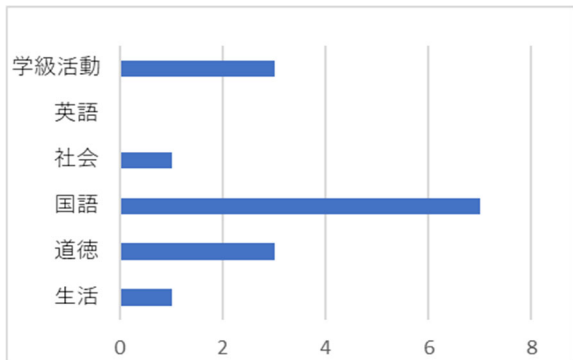


図6 ディベートを経験した科目

Q3 Q1で経験があると答えた人は、おおよその回数を数字で教えてください。

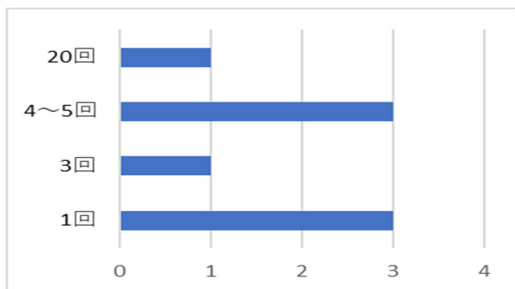


図7 ディベートの経験回数

続いて、図8~12はディベートの前段階活動やスピーチに関わる活動、グローバルリテラシーの目標に関連した学生の意識を表している。

Q4 日常生活で自分の意見を言葉に出して主張することはどのように感じていますか？

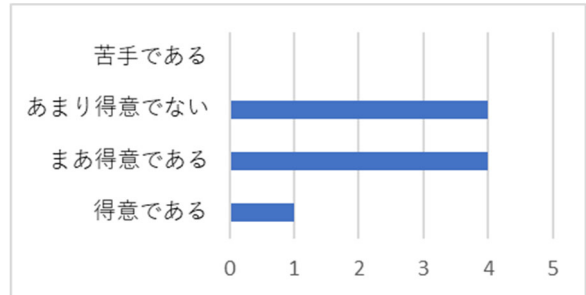


図8 意見を主張することの意識

Q5 日常生活で相手の意見を聞いて反論することはどのように感じていますか？

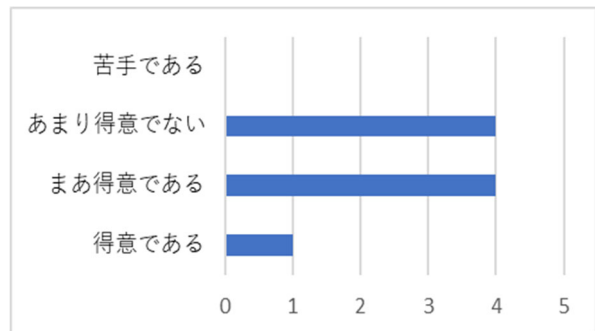


図9 反論することの意識

Q6 相手の話していることについて不明な点を質問をすることはどのように感じていますか？

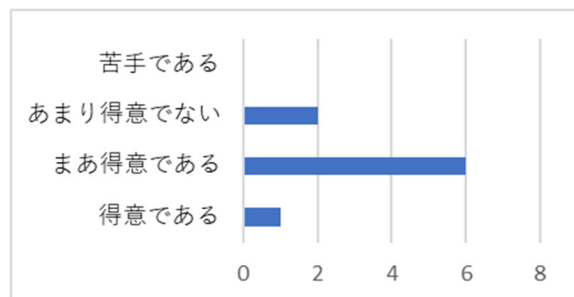


図10 不明点を質問することの意識

Q7 作文やレポートで論理的な文章を書くことについてどのように感じていますか？

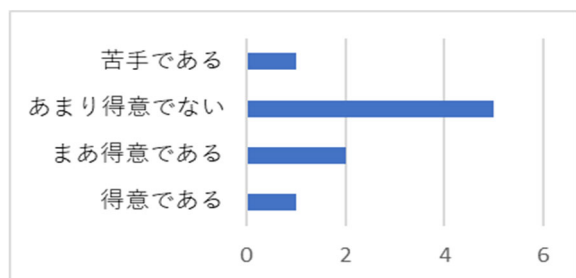


図11 論理的な文章を書くことの意識

Q8 情報の真偽を判断することについてどのように感じていますか？

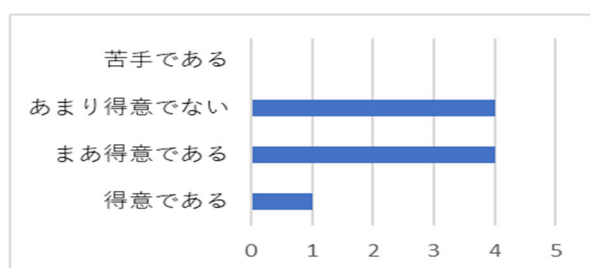


図12 情報の真偽を判断することの意識

図8の意見を主張すること、図9の反論すること、図12の情報の真偽を判断することは、得意・不得意がだいたい半々である。図10の不明な点を質問することについては得意とする学生がやや多い一方で、図11の論理的な文章を書くことについては苦手意識を持つ学生がやや多いようである。

学生の傾向から、論理的な思考にまつわるディベートの理論やモデル立論をもとに、文章のひな型を与えて文章を書かせる準備活動が次回以降必要だと判断した。

第1回目のゼミでは最後に少子化問題について現在どれほど知っているのか意識させるため、資料1(後掲)のクイズを7問を出題し、予想と実際の違いについてペアで話し、感じたことをそれぞれ述べてもらった。

第1回目のゼミの学生のコメントを一部抜粋する。

- ・出生率が高い県は地域の結びつきが強く、子育てがしやすいと学んだ。
- ・情報が不正確だったので、正しい情報を得るためにも日ごろから様々なニュースをチェックしたい。

・出生率ランキングが、読み通りなところと意外なところがあっておもしろかった。

初回のゼミではディベートの要素についてはあまり触れなかったが、ペア活動や全体での意見交換を通して少子化問題についての興味関心を持てたようであった。

4.2 ディベート活動

年度当初にシラバスで年間を通した活動について設定をしていたものの、第1回目のゼミで行ったディベート経験についてのアンケート結果をもとに、必要な前段階活動を図13のように設定した。

- ①ポリシーディベートの理論
- ②モデルディベートの朗読
- ③モデルディベートのフローシート記入
- ④育児問題についてのリサーチ
- ⑤育児問題についての意見交換
- ⑥立論の作成
- ⑦質疑・反駁の作成
- ⑧第二反駁の作成

図13 ゼミで実施する前段階活動

4.2.1 ポリシーディベートの理論

第2回目のゼミにおいて、筆者が以前ディベート入門講座で使用したパワーポイントを用い、ポリシーディベートの理論(用語は全国教室ディベート連盟主催のディベート甲子園で用いられているもの)について説明した。説明した概念は以下のものである。

- ① ロジックの三角形
議論を構成する要素(主張, データ, 根拠)の関係
- ② 現状分析
メリット・デメリットを主張する前に現状の状態について述べる必要性
- ③ プラン
肯定側が提示する現状行われていない政策
- ④ 発生過程
なぜ、プランを実行することでメリット・デメリットが発生するかの説明
- ⑤ 重要性
プランを採択して発生するメリットがなぜ重要なのかの説明

⑥ 深刻性

プランを採択して発生するデメリットがなぜ深刻なのかの説明

さらに筆者の説明だけでは初心者には難しいと考えたので、YouTube のディベート初心者向けの 10 分程度の動画「ゆっくりと学ぶ「ディベート」」を視聴してもらった。この動画は死刑制度を論題とし、ディベートの肯定側と否定側の立場の違い、競技の進め方、立論、質疑、第一反駁、第二反駁のスピーチの役割を簡単に説明してくれるものであった。

4. 2. 2 モデルディベートの朗読

第 2 回目のゼミと第 3 回目のゼミにおいて、モデルディベートの朗読を行った。男性の育児休業の論題のスク립トをインターネット上で検索した結果、韓国の大学生の日本語ディベート大会のものが最新のものであり、ディベート甲子園のフォーマットと共通性が見られたのでモデルとして採用した。決勝戦のスク립トをダウンロードし、各自に役割を分担して朗読してもらった。

4. 2. 3 モデルディベートのフローシート記入

2 回目のゼミであらかじめ、ディベートのスピーチのメモ（フローシート）の記入のポイントとして以下の点を説明した。

- ①議論の見出し（ラベル）を記録する
- ②長い言葉は自分で理解できる省略記号を用いる
例 発生過程→H
なぜなら→ B/C
- ③肯定側と否定側でペンの色を変える
- ④ある議論に対する質問や反駁などは矢印（←）でつなげるようにする。
- ⑤上段と下段で記入エリアを分ける

続いて 2 回目と 3 回目のゼミで、モデルディベートの朗読の際にスピーチをしている人以外は、フローシートに聞き取った情報を記入する演習を行った。記入後に勝敗の判定を各自出してもらい、実際の試合の勝敗を確認し、筆者が記入したフローシートをスクリーンに映して議論の流れや勝敗のポイントを解説した。

4. 2. 4 育児問題についてのリサーチ

第 4 回目のゼミで、『2022 年日本こうなる』の中から男性の育児休業について述べた朝生(2021)の論文と、『これからの日本の論点 2022』の中から少子化が与える社会保障について述べた、山口(2021)の論文を配布し、さらに図 14 のように Google Classroom においてもインターネット上の記事を 4 回目以降のゼミで適宜紹介した。また、学生各自もスマートフォンやタブレット端末を使って、立論や反駁のスピーチを作成する際にインターネット上の記事を検索した。



図 14 Google Classroom で紹介する記事

4. 2. 5 育児問題についての意見交換

ゴールデンウィークを挟んで間が開いてしまった第 5 回目のゼミでは、実際に働きながら育児を行う上でどのような問題に直面するかイメージしやすくするために、2017 年放映のドラマ『コウノドリ』の第 3 話「母を救え 産後うつと無痛分娩…」を視聴してもらった。ドラマでは出産後に仕事復帰をあせる女性が徐々に追い詰められて産後鬱になるというストーリーが展開し、視聴後に下記の 2 つの問いを出して、自分の考えを発表してもらった。

- ①産後の母親を精神的に不安定にさせる要因は？
- ②産後に父親が母親に対してするサポートはどのようなものが望ましいか？

学生の授業に対するコメントを一部抜粋する。

- ・妊婦さん一人ひとりのバックグラウンドも違う中で、サポートしていく人も一人でないことから、どうすれば一人ひとりに必要な支援ができるかを考えるべきだと思った。
- ・うつになりそうになるというのは聞いたことが

あるが、あるだけでよく分かっていなかったので、細かなところまで知れたので良かった。

論文や記事を読むだけでは、出産育児に悩む当事者の心情を想像することは10代の学生には難しいものであると思われたが、ドラマを見ることで、支援を必要とする人の実態や、どのような支援が望ましいのか問題意識が高まったようであった。

4. 2. 6. 立論の作成

第4回目のゼミで筆者が前任校でディベートクラブを担当していた際に作成した男性の育児休業についての立論を参考資料として配布し、Google Classroom上に立論の分析シートと立論のひな型のワードファイルをアップロードし、ゴールデンウィークの宿題として肯定側と否定側の立論をそれぞれ作成する課題を指示した。しかし、提出された課題を見ると、モデルの立論の作りをうまくまねて、資料を引用して自分の主張を展開しているものから、主張だけで理由付けが不十分なものなど、学生間での課題の仕上がり具合に差が見られた。Google Classroomを通じて、それぞれのスピーチについて改善点を書き込んだファイルを返却した。

4. 2. 7 質疑・反駁の作成

第6回目と第7回目の授業は、筆者が新型コロナウイルス感染の濃厚接触者になり自宅待機となったため、ゼミの最初にビデオ会議で課題の指示を与えて学生だけでグループ作業をするという形になった。

第6回目の授業では、学生たちが作成した立論を参考に共通する論点を抜き出して、筆者が男性の育児休業について肯定側立論と否定側立論の原稿を作成し、それぞれの立論に対して図15の作戦シートに質疑と反駁を記入する課題を与えた。

第7回目の授業では、学生が作成した作戦シートをもとに、肯定側と否定側の第一反駁のスピーチを作成する課題を出した。第8回目の授業は対面で行うことができたので、質疑応答と反駁のスピーチのイメージをつかんでもらうために第24回ディベート甲子園(2019)中学の部・決勝戦の動画の立論から第一反駁までを視聴してもらった。続いて、肯定側と否定側

のペアを作り、ペアで筆者が作成した立論に対してそれぞれの立場から質疑と第一反駁のスピーチをする活動を行った。

学生のコメントを一部抜粋する。

- ・全国大会のレベルの高さに驚いた。同じレベルにはできないかもしれないが、資料集めや言葉の使い方などで分かりやすく、筋の通った意見にできるようにしていきたいと思った。
- ・肯定側の反駁をしたが、反駁するとこの言葉と資料の違いなどを指摘してもらったので、資料の読み込みや他の資料を探してみたいと思った。
- ・4分間のスピーチでかなり時間が残ってしまったので、次からは論点のまとめなどを入れて時間いっぱい頑張りたい。

論理的に考えて質問をすることや限られた時間の中でスピーチすることの難しさを学べたようである。

立論	質問	反駁	再反駁
<p>プラン 育児休業期間は1ヶ月以上とする</p> <p>現状分析① 少子化の進行 厚生労働省人口統計 2020年の出生数 84万人 前年 2.8% ↓ 合計出生数 1.34</p> <p>現状分析② 男性の育児取得状況 令和2年厚生労働省調査 育児休業取得率 7.49% (2020) 前年 2.6% (2019) 上司は9割 42.7% (2020) 育児休業取得率 7.49%</p> <p>発生過程「育児の義務化」 ① 休日の育児時間 第2時 6時間以上 87.1% 4~6時 79.7% なし 18%</p> <p>山口聡 直感性1「社会保険制度の維持」 ① 少子化による人口減少 ② 高齢化による社会保障費の増加 ③ 医療・介護費用の増加 2018~2050 1.6倍 増加が40%?</p> <p>直感性2「産後クライシスの回避」 産後クライシスとは? 産後1年以内のうつ病 男は育児参加が女性より少ない</p>	<p>元年→今年の日時経過 朝生の子供は? ママは? パパは?</p> <p>山口聡は本当に? 2018年と今の現状が違うのでは?</p> <p>ペアは誰が書いたの? かたよった意見になっているのでは?</p>	<p>半率に直し</p> <p>元年から4年(現行)かけて取得率、変化があるのでは?</p> <p>母かたとして10%いるから育児しなくていいのでは? 休日(6時間以上)で87.1%いるのだから、育児も休日も作れればいい</p> <p>重要件2のペア引用のペアはかたよった意見などが含まれている可能性が高い。信用性が低い</p>	

図15 作戦シート

4. 2. 8 第二反駁の作成

第9回目のゼミで、第二反駁のスピーチの流れについて説明した後で、筆者が作成した図16の第二反駁演習シートを配布した。

続いて、フローに書かれている議論が進んできたと仮定して、どのように第二反駁のスピーチをするのかを、肯定派グループと否定派グループの中で考え、右2つの空欄にスピーチで話すポイントを記入しても

らった。さらに肯定側と否定側でペアを作り、ペアでフローシートの議論の流れに沿ってそれぞれの立場から第二反駁のスピーチをする活動を行った。

学生のコメントを一部抜粋する。

- ・第一反駁よりも第二反駁がかなり難しかった。最後の価値の比較もできなかった。第二反駁は、第一反駁よりも多くの資料を見ないといけないので難しく感じたと思う。
- ・相手の立論のどこが良くて、自分の立論がどれだけ筋が通っているのかを詳しく伝えることが勝敗に左右するのではと思った。
- ・最後に肯定側と否定側の意見を比べるときに、どれで勝負したら勝てるかを見つけるのが難しかった。

第二反駁のスピーチを経験することで、男性の育児休業を義務化する際に育児に参加する機会の増加、出生率の向上が見込めて社会保障体制が維持できるというメリットと、休業が義務付けられることで個人の昇進の機会を逃す可能性や、企業の人材不足による不利益というデメリットを比較する視点を持つことができたようである。

5 中間発表

シラバス上では、第二反駁のスピーチを経験した後で、チームに分かれてディベートの試合をする予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で筆者が自宅待機になったり、学校全体で感染防止のために遠隔授業を行うことになった事情もあり、試合を行うことはできなかった。しかしディベート形式で論題を設定し、各ステージのスピーチを経験することで、男性の育児休業問題についての理解は深まったようである。

中間発表が後期の第2週目に延期になり、前期中間試験後の第10週、第11週、第12週は中間発表の準備にあて、第13週と14週は後期の政策提案型パブリックディベートの内容を先取りし、夏休み明けの第15週に中間発表のリハーサルを行った。

中間発表では、少子化問題の中でも男性の育児休業問題についてディベートに取り組んだことを発表するために、Aグループを肯定側グループ、Bグループを否定側グループとして立論をもとに資料を作成してもらった。

肯定側は男性の育児休業義務化の進める立場で、現状分析のところグローバルな視点を含めるために、フランスと比較するグラフ(図17)や山口(2021)の論文で出てきた夫の育児に関わる時間で第2子以降の出生率が変化するデータ(図18)など、視覚的に訴えるスライドを作成できた。

なぜ増えたのか



このような意識の違いも義務化することで改善している

図17 肯定側のスライド例①

Resolved that	Q by Neg	NC	Q by Aff	1NR	1AR	2NR	1AR
<p>2.1 子育て義務化の是非</p> <p>3. 子育ての重要性</p> <p>4. 子育ての重要性</p> <p>5.1 子育ての重要性</p> <p>5.2 子育ての重要性</p> <p>5.3 子育ての重要性</p> <p>5.4 子育ての重要性</p> <p>5.5 子育ての重要性</p> <p>5.6 子育ての重要性</p> <p>5.7 子育ての重要性</p> <p>5.8 子育ての重要性</p> <p>5.9 子育ての重要性</p> <p>5.10 子育ての重要性</p> <p>5.11 子育ての重要性</p> <p>5.12 子育ての重要性</p> <p>5.13 子育ての重要性</p> <p>5.14 子育ての重要性</p> <p>5.15 子育ての重要性</p> <p>5.16 子育ての重要性</p> <p>5.17 子育ての重要性</p> <p>5.18 子育ての重要性</p> <p>5.19 子育ての重要性</p> <p>5.20 子育ての重要性</p> <p>5.21 子育ての重要性</p> <p>5.22 子育ての重要性</p> <p>5.23 子育ての重要性</p> <p>5.24 子育ての重要性</p> <p>5.25 子育ての重要性</p> <p>5.26 子育ての重要性</p> <p>5.27 子育ての重要性</p> <p>5.28 子育ての重要性</p> <p>5.29 子育ての重要性</p> <p>5.30 子育ての重要性</p> <p>5.31 子育ての重要性</p> <p>5.32 子育ての重要性</p> <p>5.33 子育ての重要性</p> <p>5.34 子育ての重要性</p> <p>5.35 子育ての重要性</p> <p>5.36 子育ての重要性</p> <p>5.37 子育ての重要性</p> <p>5.38 子育ての重要性</p> <p>5.39 子育ての重要性</p> <p>5.40 子育ての重要性</p> <p>5.41 子育ての重要性</p> <p>5.42 子育ての重要性</p> <p>5.43 子育ての重要性</p> <p>5.44 子育ての重要性</p> <p>5.45 子育ての重要性</p> <p>5.46 子育ての重要性</p> <p>5.47 子育ての重要性</p> <p>5.48 子育ての重要性</p> <p>5.49 子育ての重要性</p> <p>5.50 子育ての重要性</p> <p>5.51 子育ての重要性</p> <p>5.52 子育ての重要性</p> <p>5.53 子育ての重要性</p> <p>5.54 子育ての重要性</p> <p>5.55 子育ての重要性</p> <p>5.56 子育ての重要性</p> <p>5.57 子育ての重要性</p> <p>5.58 子育ての重要性</p> <p>5.59 子育ての重要性</p> <p>5.60 子育ての重要性</p> <p>5.61 子育ての重要性</p> <p>5.62 子育ての重要性</p> <p>5.63 子育ての重要性</p> <p>5.64 子育ての重要性</p> <p>5.65 子育ての重要性</p> <p>5.66 子育ての重要性</p> <p>5.67 子育ての重要性</p> <p>5.68 子育ての重要性</p> <p>5.69 子育ての重要性</p> <p>5.70 子育ての重要性</p> <p>5.71 子育ての重要性</p> <p>5.72 子育ての重要性</p> <p>5.73 子育ての重要性</p> <p>5.74 子育ての重要性</p> <p>5.75 子育ての重要性</p> <p>5.76 子育ての重要性</p> <p>5.77 子育ての重要性</p> <p>5.78 子育ての重要性</p> <p>5.79 子育ての重要性</p> <p>5.80 子育ての重要性</p> <p>5.81 子育ての重要性</p> <p>5.82 子育ての重要性</p> <p>5.83 子育ての重要性</p> <p>5.84 子育ての重要性</p> <p>5.85 子育ての重要性</p> <p>5.86 子育ての重要性</p> <p>5.87 子育ての重要性</p> <p>5.88 子育ての重要性</p> <p>5.89 子育ての重要性</p> <p>5.90 子育ての重要性</p> <p>5.91 子育ての重要性</p> <p>5.92 子育ての重要性</p> <p>5.93 子育ての重要性</p> <p>5.94 子育ての重要性</p> <p>5.95 子育ての重要性</p> <p>5.96 子育ての重要性</p> <p>5.97 子育ての重要性</p> <p>5.98 子育ての重要性</p> <p>5.99 子育ての重要性</p> <p>6.00 子育ての重要性</p>							

図16 第二反駁演習シート

義務化による出生率の上昇

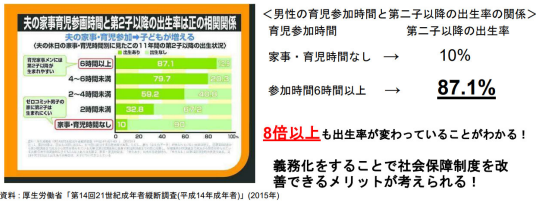


図 18 肯定側のスライド例②

一方、否定側は男性の育児休業を義務化せずに現状の制度を維持するという立場のため、現状の制度について説明するスライド(図 19)や、企業の人手不足を表すグラフ(図 20)など、視覚的にとらえやすいスライドを作成できた。

現在の育児休業制度

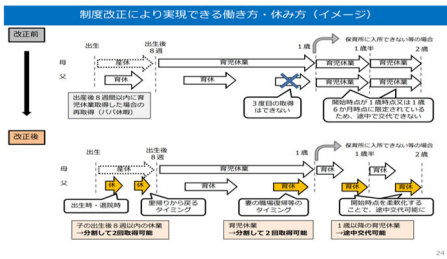


図 19 否定側のスライド例①

義務化をした場合のデメリット 3 企業の人手不足

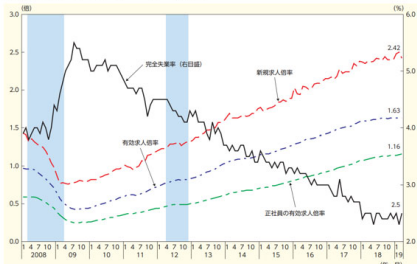


図 20 否定側のスライド例①

中間発表は、3ゼミ合同の5グループでパワーポイントを用いた8分の発表と3分の質疑応答を行った。全ゼミ共通の中間発表ルーブリックを用いて自分の担当するゼミを評価する一方で、オーディエンスの学生も他のゼミの発表を同じルーブリックで評価しコメントを書いて Google Forms で提出するピア評価も行われた。

中間発表のルーブリックの内容を図 21 に示す。

項目	内容
研究内容	①研究の意義・問いの設定 ②調査
プレゼンテーション	①パワーポイント ②話し方
質疑応答	①質疑への応答 ②他グループの発表への質問

図 21 中間発表ルーブリック

「研究内容」と「プレゼンテーション」については3段階のレベル評価で、上から3,1,0の配点である。

「質疑への応答」と「発表への質問」については3段階のレベル評価で、上から2,1,0の配点である。

他のグループからの筆者のゼミの学生への評価の平均値を表1に示す。

表 1 中間発表ピア評価平均値

	A肯定側	B否定側
研究内容 (満点3)	2.2	2.4
プレゼンテーション (満点3)	1.6	2.2
応答 (満点2)	1.6	1.6
質問 (満点2)	1.7	1.8

肯定側グループへのピアコメントの一部を抜粋する。

よかった点

- ・パワーポイントのメリット・デメリットが大きい見出しで作成されており、整理しやすかった。また、質問に的確に簡潔に解答できているところがよかった。
- ・肯定派の意見をいろいろなデータをもとに述べていて、説得力があり興味深い発表だった。
- ・男性の育休をとることのメリットを、海外の実例とともに発表しているのが良いと思った。

修正すべき点

- ・ずっと、スマホの原稿を見ていて前を向いて話せていなかったところが修正点だと考える。
- ・発表内容をもっと地域と結びつけると良いと思った。
- ・問いの設定が曖昧で、ディベートを通して、とい

う手段が目的になっているように感じた。中間発表以降何をするのが気になった。

否定側グループへのピアコメントの一部を抜粋する。

よかった点

- ・発表時の声は的確な大きさだと思う。また、質疑応答で分からないところは素直に分からないと言っていた点も良いと思う。
- ・資料がたくさんあったので、確実な数字が見れたのが発表の確実性が高くなっていてその点がよかった。
- ・全員はしっかりと聞き取りやすい声で話していてよかった。また、話の順序も理解しやすかった。

修正すべき点

- ・内容は理解しやすかったが、テーマとの関連性や解決方法などももう少し広い視点で話してほしい。
- ・タイトルに「少子化問題」とあったのに、内容には少子化に触れられている所はなかったためタイトルに合った内容にすべきだと思った。
- ・男性の育児休暇義務化をしない場合に、取得率をどう上げていくのが良いのか具体的なたとえがあると良いと思う。

ピアコメントでも指摘されたように、一年間の少子化問題に対する取り組みという枠組みの中で、男性の育児休業問題についてディベートを行ったこと、位置づけが分かりづらかったことや、中間発表後の研究の方向性を示せなかったこと、原稿をプリントアウトして目線を上げて話すことを指導できなかったことが反省点である。一方で、ゼミの中でモデルディベートに対する疑問を考えてスピーチする活動が、実際に他者の発表を聞いた際に活かされていることが確認できた。

6 学生の変容

前述したグローバルリテラシーのルーブリックの各項目について学生は5段階の自己評価を行った。ポリシーディベートの活動を行った第2回目から第9回目のゼミで実施した学生のルーブリック自己評価の平均値は表2のようになった。

表2 ルーブリック自己評価の平均値

	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回
コミュニケーションスキル	4	4.3	4.4	4.1	4.1	4.5	4.4	4.6
情報収集・活用力	4.1	4.3	4.1	4.2	4.2	4.4	4.2	4.5
情報発信力	3.7	4	4.1	4.3	4.4	4.3	4.4	4.1
論理的思考力	3.8	4.1	4.1	4.1	4.3	4.4	4.6	4
主体性	4	3.8	4.5	4.3	4.3	4.6	4.2	4.1
チームワーク力	4.2	4.3	4.3	4.2	4.3	4.3	4.1	4.1

コミュニケーションスキルのルーブリックの到達目標は「他者の話をしっかり聞くことができる」であり、ビデオ視聴をした5回目や遠隔授業の不備で待機時間が長くなってしまった6回目は低い評価であったが、意見交換が活発になった後半に向けてメンバーの間でコミュニケーションが円滑になったようである。

情報収集・活用力のルーブリックの到達目標は「収集した情報から活用すべき情報を選択できる」であり、毎回のゼミで書籍の論文やインターネット上の記事から情報を抜き出す活動を行っていたので自己評価はあまり変化がなかったが、9回目で第二反駁を行った際に、価値の比較を通して情報を読み取る行動を行い評価が高くなったようである。

情報発信力のルーブリックの到達目標は「収集した情報を正しく発信できる」であり、第2回目は主に筆者のレクチャーが中心だったので自分たちから発信する活動が少なく数値は低いものの、質問と反駁を扱った第5回目から第8回目まで活発になり、第二反駁の第9回目はすでに与えられた流れでスピーチを考えたので数値が若干下がったようである。

論理的思考力のルーブリックの到達目標は「事実をもとに論理的に考察できる」であり、ディベート活動の根幹をなすものである。第2回目は理論を受け身的に学ぶ活動だったので、若干数値が低く、自分たちで質疑や反駁を考える作業をするにつれて数値が上がっていったが、第二反駁はやはり与えられた時間内でスピーチをまとめることに苦心した感想があったように、自己評価も厳しめになったようである。

主体性のルーブリックの到達目標は「周囲の状況と自身の立場に照らし、必要な行動をとることができる」であり、第3回目は役割が割り振られてスクリプトを音読したりメモを取る作業など個人の作業が多か

ったので数値が低くなったようであるが、チームやペアの話し合いや活動が多いときは肯定的な評価が見られた。

チームワーク力のルーブリックの到達目標は「チームのメンバーとしての役割を把握した行動ができる」であり、前期の間は筆者の目から見ると男女間や違うクラスのメンバー同士で少し遠慮が見られたように感じられたが、中間発表の準備を通して活発に言葉を交わす機会が増えたように思われた。

7 最終発表に向けて

中間発表の段階では、少子化という大枠の中で育児休業という小さな問題点を2つの立場から分析したにすぎない。中間発表が後期の第2週に延期になったため、夏休み前の2回分の授業から政策提案型パブリックディベートの活動に入った。テーマは「2030年までに長崎県の合計特殊出生率を2.0%まで上げるための政策」であり、2グループを「行政側アプローチ」と「企業側アプローチ」に分けた。中間発表において他のグループからローカルの視点が乏しいことを指摘されたので、長崎県における政策を検討するテーマにした。

全国の各自治体や各企業での子育て支援政策をリサーチし、パブリックディベートの実際の試合動画を見てスピーチのフォーマットを理解させ上で、夏休みの課題として各自で行政側または企業側の立場から出生率を上げる政策を提案するスピーチを書かせた。これから各自のスピーチに対してピア評価を行い、それぞれのチームとして最善の政策を練り上げる活動を予定している。

最終発表はポスター発表の形式で、メンバーひとりひとりが自分たちが取り組んだ研究を発表していくことになる。「グローバル」のテーマに沿うように、世界との比較、日本全体のグローバルな視点で少子化問題について分析させたうえで、長崎県の少子化を解決するためのローカルな政策を行政側または企業側からの提案をし、それがどのように問題解決につながるのか自分たちの言葉で説明ができるように今後指導をしていきたい。

参考文献

- 北岡敏明, 意思決定ディベートの技術—ディベートが組織を活性化する—, 中央経済社, 1995
- 日本ディベート協会, 教育ディベートとは
<https://japan-debate-association.org/debate/academic-debate>
 (2022年10月アクセス)
- 松本茂, 鈴木健, 青沼智, 英語ディベート 理論と実践, 玉川大学出版部, 2008
- 上田真梨子, 高等学校におけるディベートの前段階活動を選択する観点, 中国地区英語教育学会研究紀要, 第32号, pp.1-10, 2002
- 朝美淑子, 英語ディベート教育の実情—学習指導要領・教科書の分類を含めて—, 大分工業高等専門学校紀要, 第55号, pp.7-10, 2018
- 朝生万里子, 改正育介法で取得は加速するか, 三菱UFJリサーチ&コンサルティング編, 2022年日本はこうなる, 東洋経済新報社, p238-239, 2021
- 山口聡, 「少子化」と「多様な働き方」に社会保障は対応できるか, これからの日本の論点2022 日経大予測, 日本経済新聞社, p75-89, 2021
- 佐野, ゆっくりと学ぶ「ディベート」,
<https://www.youtube.com/watch?v=PnuqA1DQBbM>
 (2022年10月アクセス)
- 韓国大学生日本語ディベート大会, 第5回韓国大学生日本語ディベート大会全国杯決勝戦トランスクリプト,
<https://nihongodebate.wixsite.com/korea/transcript-dai5kai>
 (2022年10月アクセス)
- 全国教室ディベート連盟, 第24回ディベート甲子園(2019) 中学の部・決勝戦,
<https://www.youtube.com/watch?v=27pPtt6neUA>
 (2022年10月アクセス)

(資料1)

Q1 2021年の子供の出生数は何万人？

①64万人 ②84万人 ③104万人

Q2 2020年の合計特殊出生率(一人の女性が生涯で産むこどもの数)は何%？

①1.34 ②1.54 ③1.74

Q3 2020年の都道府県別出生率ランキングにあてはまる県を答えなさい。

順位	都道府県名	出生率
1位	()	1.86
2位	()	1.69
3位	()	1.68
4位	()	1.64
5位	()	1.63

Q4 女性の産前休暇は予定日の何週間前からとれる？

①4週間 ②6週間 ③8週間

Q5 育休も産休と同じく正社員、パート社員、派遣社員、契約社員、アルバイトなど雇用形態に関係なく取得可能。同じ勤務先でどのくらいの期間働いていれば取得可能？

①3か月 ②6か月 ③1年

Q6 2020年の男性の育児休業取得率は何%？

①12.7% ②22.7% ③32.7%

Q7 育児・介護休業法23条で「3歳に満たない子を養育する労働者」に関して、企業は短時間勤務制度を設けないといけません。短時間勤務は1日最低何時間？

①4時間 ②5時間 ③6時間